



高志台 学園だより

NAGAOKA NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY

長岡高専50周年記念特集号

2012. 6. 2発行

CONTENTS

- 02 創立50周年を祝って
- 03 長岡高専50周年記念事業紹介
- 04-07 あの日あの時 長岡高専50年の歩み
- 08 長岡工業高等専門学校校歌

★ 高志台 (こうしだい)

古代、新潟県を含む日本海側の一帯は、“こしのくに”(越の国・古志の国・高志の国)と呼ばれていました。
学生に高い志をもってほしいとの願いと歴史上の地名とを関連させて学校のある台地を「高志台 (こうしだい)」と命名しました。



独立行政法人国立高等専門学校機構

長岡工業高等専門学校

Nagaoka National College of Technology

〒940-8532 新潟県長岡市西片貝町888 <http://www.nagaoka-ct.ac.jp/>

創立50周年を祝って

校長 渡邊 和忠

本校は昨年創立50周年を迎え、東日本大震災等のために延期しておりました記念式典を本年6月2日(土)にめでたく執り行なう運びとなりました。記念式典開催にあたり、本校の歴史を築き、長年に渡って本校を支えてくださった同窓生、技術協力会の皆様方、後援会の方々、関係する全ての方々に心から御礼を申し上げると共に、この喜びを分かち合うことができますことに深く感謝しております。

高等専門学校制度は昭和37年に創設されましたが、長岡工業高等専門学校は制度創設1年前の昭和36年に、長岡工業短期大学を前身として全国の高専に先駆けて設置されました。古い記録を紐解きますと、本校の創立は長岡地域の人たちの強い想いと期待に支えられて紆余曲折の後にやっと実現したことが記されており、改めてその重みを強く感じないではいられません。昭和24年に新制大学が発足し、6、3、3、4の学制が整備されましたが、昭和32年頃から問題点も指摘され、専科大学創設に向けた新しい構想が国会で審議されるようになりました。長岡市は、このような機運を受けて、先ず新潟県立長岡工業短期大学を設置し、その後、専科大学に移行する計画を立てて昭和33年9月に文部省への申請まで行ないましたが、成功しませんでした。そこで、昭和35年には長岡に新潟大学の工業短期大学部を設置する計画を立て、期成同盟会を設立して各方面に働きかけを行ないました。このような努力が功を奏し、昭和36年1月に予算化され、新潟大学・工業短期大学部の設置が決まりました。翌2月には新潟大学とは分離・独立した工業短期大学とすることが決定され、同年4月1日に本校は国立の長岡工業短期大学として開学しました。その間にも国では専科大学に代わる5年制の高等専門学校制度の創設も着々と進められていました。昭和36年4月に高専法案が成立すると熾烈な誘致運動が全国各地で繰り広げられましたが、長岡工業短期大学は当初より高専制度発足と同時に高専として改組することが予定されており、長岡工業高等専門学校に移行しました。創設期の希望に溢れた時期から、学園紛争、中越地震などの苦難を乗り越え、また、平成16年以降は独立行政法人国立高等専門学校機構の一員となり、今日まで51年間にわたり総計8,894名の本科卒業生を、355名の専攻科修了生を輩出して参りました。中越地震では本校も大きな被害を受けましたが、文部科学省を始め機構本部、全国の高専、両技術科学大学、県内・市内の大学、本校の技術協力会、同窓会、後援会等、本当に多くの方々から心温まるご支援を賜り、以前にも増して素晴らしい教育環境を実現することができました。当時、ご支援を下さいました皆様方には、この場をお借りして改めて御礼を申し上げます。

高専は、当初、いわゆる中堅技術者の養成を目的として設置されたと言われていました。しかし、当時、高専を選ん

だ学生たちは、決して中堅技術者になることを望んで高専に入学した訳ではなく、5年間で大学レベルの教育を受けられることに魅力を感じて入学し、高専で学び、卒業生は優れた技術者として日本の発展に大きく貢献してきました。過去50年の間、日本は、信頼性の高い優れた製品を製造する「ものづくり」によって不動の「技術立国」を築き上げてきました。今、50年の歳月を経て、時代は大きく変わりました。近年、アジア地域を始めとする国々の発展は目覚ましく、また急激な円高の影響もあり、日本の製造業は深刻な打撃を受けています。それにも拘らず、資源のない日本はこれからも「技術立国」として世界をリードする以外、他に生きる道はありません。そのためには「技術立国日本」を担う優秀な技術者が必要であることは誰の目にも明らかです。どうすれば優秀な技術者が養成できるのでしょうか。私は高専制度に重要な手がかりを見いだすことができると感じています。高専教育の本質は実践を通じて新たな技術を創造するに必要な知識と能力を心と身体に染込ませる人格形成教育です。高専制度は人生の中で最も感受性豊かで、柔軟性に富み、旺盛な好奇心をもつ時期、即ち、教育を行なうに最も効果的な成長の時に、一貫した理念に基づいて人間形成までを含めた技術者教育を行なう場として設計されています。中学卒業からの5年、或いは専攻科までの7年の間に、勉学、実習、研究、課外活動、寮での教育、社会体験などを通して実践的・創造的技術者として必要なあらゆる術を学生自らが心と身体に植え付け、彼らが成長して行く姿を教職員、保護者、関係する全ての人たちが一丸となって支える優れた教育システムです。高専の教員は学生のことを親身になって考えています。学生も教員を慕っています。高専卒業生は高専が大好きです。多くの高専出身者は自らの子弟を高専に入学させています。また、兄弟で高専に入学していることも稀ではありません。即ち、これらは高専の教育が高く評価されている証ではないでしょうか。私たちは、この優れたシステムの特長を最大限活用し、時代の流れを読み、時代を先取りした教育を行なうことによって、これからも常に日本が、世界が必要とする優れた人材を輩出し、10年後、20年後、50年後においても、長岡高専は素晴らしい学校であると言って頂けるように教職員一同、心をひとつにして奮励努力する決意であります。

最後に、今一度、本校の歴史を刻んで下さった全ての方々に心から感謝すると共に、50周年記念事業に多大なるご支援を賜りました皆様に御礼を申し上げます。



長岡高専50周年記念事業紹介

1. 記念式典

日 時：平成24年6月2日(土)午後4時30分から午後5時30分（予定）

会 場：ホテルニューオータニ長岡 NCホール

2. 記念祝賀会

日 時：平成24年6月2日(土)午後5時45分から午後7時15分（予定）

会 場：ホテルニューオータニ長岡 白鳥の間

3. 記念講演会

日 時：平成24年6月2日(土)午後1時30分から午後3時30分

会 場：長岡市立劇場 大ホール

講演者：数学博士・大道芸人 ピーター・フランク氏

演 題：「真の国際人を目指すために」

4. 創立50周年記念誌の刊行

創立から50年間の歴史を振り返り、本校の歴史を時代とともにつづった記念誌を刊行しました。

（写真を数多く載せ、資料・敷地全景写真のハガキを含み120頁にも及ぶ記念誌に仕上がりました。長岡高専のHPのトップページ（<http://www.nagaoka-ct.ac.jp>）の「創立50周年記念事業案内」から内容を見ることができますので、ぜひご覧ください。）

5. ロゴマークの制定



本校在学生を対象として、本校のイメージにふさわしい、地域の皆様に親しまれるロゴマークを募集したところ、256点の応募がありました。その中からロゴマーク選考委員会による厳正な審査の結果、本校在学生機械工学科 吉田智広 さんの作品に決定しました。

6. 記念植樹

創立50周年記念植樹、さらに教育環境の向上及び緑化推進を目的にした敷地内の植樹を予定しています。

あの日あの時 長岡高専50年の歩み

一般教育科 田中 聡 (50周年記念誌担当)

明治20年代、長岡高専の背後に連なる東山丘陵で油田の掘削がはじまりました。以後、長岡は石油ブームに沸き、「オイルシティ」と呼ばれるほどに活況を呈しました。石油業の発展は掘削機の修理や製作を行う鉄工業を生み出し、昭和10年には、「工業立市」宣言がなされました。米百俵の故事に象徴される「ひとづくり」のまち長岡に、「ものづくり」のまちというもう一つの顔が付け加わったのです。

長岡に最初の工業系高等教育機関である長岡工業高等学校が創設されたのは、大正12年のことでした。同校は昭和19年、長岡工業専門学校に改称し、昭和24年には新潟大学工学部として再出発しました。一方、日本が戦後復興を遂げるとともに高まってきた中堅技術者の養成を求める声を背景とし、昭和36年には長岡高専の前身である国立長岡工業短期大学が設立され、翌37年には長岡高専が誕生しました。

短大・高専の創設から半世紀一。この間、昭和51年には長岡技術科学大学が開学し、平成12年には長岡高専に専攻科が設置されるなど、工業に特化した「ひとづくり」の伝統はさらに深化を遂げました。そして今、これまでの歩みを振り返るとともに、次の50年に向けて、さらなる飛躍を誓いあう時がやってきました。

昭和36年4月1日

長岡高専の前身となる**国立長岡工業短期大学**が設立され、学長に山崎貫三（前新潟大学工学部長）が就任した。5月13日に最初の入学試験が行われ、6月1日に第1回入学式が新潟大学工学部（長岡市学校町）の講堂で行われた。授業は新潟大学工学部の校舎を借りて6月5日に開始され、初年度は夏休み返上で授業が行われた。この年、長岡高専で現在も使用されている学章のデザインが定められるとともに、新校舎建設地の愛称として「高志台」が選定された。



短大の門標を掲げる穂苅忠二事務長



昭和36年9月8日 整地中の工事現場を視察する山崎貫三短大学長(右端)ら

昭和37年4月1日

最初の国立工業高等専門学校12校の1校として、**長岡高専**が誕生した。初代校長には、短大学長の山崎貫三が就任した。教職員も短大との兼任であった。高専創設のニュースに対する社会の関心は高く、長岡高専の入試倍率も12倍を超える狭き門となった。入試問題とともに合格者の名前と出身中学名も新潟日報紙上で公表された。

4月20日には新潟大学工学部の講堂で開校式と第1回入学式が
 挙行された。当時はまだ専用の校舎がない状況だったため、長岡市
 立東中学校（今朝白町、現在の長岡市立阪之上小学校の場所）や
 新潟大学教育学部附属長岡小学校の旧校舎（東神田町）を仮
 校舎として使用した。仮校舎で迎えた高専最初の冬は豪雪に見舞われ
 （三八豪雪）、雪による臨時休校の措置も取られた。



高専第1回入学式（山崎校長の訓辞）

昭和38年6月15日

新校舎の整地工事がはじまったのは昭和36年8月4日、校舎建設の
 第一期工事が竣工したのは昭和37年11月8日のことだった。仮校舎
 で勉学に励んでいた短大生と高専生も新校舎へ順次移動した。
 昭和38年6月15日、「高志台」の誕生を祝う**開学・開校記念式、
 竣工式**が挙行され、文部省関係者、教職員、学生代表など約200名
 に見守られる中、高志台の歴史が幕を開けた。

昭和41年3月18日

短大の第4回にして最後となる卒業式が行われた。4月1日、短大は
 正式に廃止され、中堅技術者養成の社会的使命は、長岡高専にバトン
 タッチされた。

昭和41年6月4日・5日

創立5周年を記念して、**第1回高志祭**が
 開催された。統一テーマには、「無限の発展
 そして未知の栄光への闘い」が掲げられた。
 4日には創立5周年記念式典が行われ、
 その場で校歌の発表演奏が行われた。



昭和42年3月18日

長岡高専第1回卒業式が行われ、最初の卒業生135名が高志台
 から巣立っていった。卒業生代表は、「第1期生としての自覚を持ち、
 常に自主独立の精神で新しい社会に向っていききたい」と力強く
 述べた。

昭和43年4月1日

土木工学科が増設され、**機械工学科・電気工学科・工業化学科**と

あわせて4学科体制となった。

昭和45年6月29日

全国的に学生運動が盛り上がる中、本校でも学生準則をめぐる**学園
 紛争**が起き、この日、休校措置が取られた。休校措置は、7月12日
 まで続いたが、夏休み明けには事態は沈静化に向った。他高専
 では、機動隊が導入されたり、処分者が出たりしたところがあったが、
 本校では一人の処分者も出すことなく事態は収拾された。



学生との討論会で発言する田健一校長

昭和51年10月1日

長岡技術科学大学が開学し、事務局が本校に設置された。高専卒
 業者の進学問題が高専制度発足直後から問題化しており、専攻科
 構想や新構想大学（院）の創設などが議論されていたが、長岡と
 豊橋の技術科学大学の設立により、この議論に終止符が打たれる
 ことになった。長岡技術科学大学は昭和53年度から学生を受け
 入れているが、これ以降、本校から多くの学生が進学している。

昭和57年5月14日

創立20周年記念講演会として、前年にノーベル化学賞を受賞した
 福井謙一氏の講演「科学と私と人生」が行われた。また、11月1日
 には、高志祭で刀匠・天田昭次氏の講演「日本刀のできるまで」が
 行われた。さらに『長岡高専二十年史』の編集も進められ、昭和59年
 に刊行された。

昭和60年4月

国際青年年にあたるこの年、マレーシアから**本校では初めての留学生**
 （3名）が編入した。国際化時代の到来を実感させる出来事で、当時
 の「学園だより」にも、「我校における新しい歴史の1ページ」と
 記されている。

昭和61年6月1日

創立25周年記念式典が長岡市厚生会館大ホールを会場に挙行
 された。式典には来賓のほか後援会・同窓会の役員、在校生ら1300
 名が集った。式典では、25周年を記念して作成された校旗が同窓
 会から寄贈された。また、この日の午前には、本校正面前庭におい



て、校歌記念碑の除幕式も行われた。



平成2年4月1日

機械工学科2学級が機械工学科1学級と電子制御工学科1学級に改組された。これにより本校は5学科体制となった。

平成2年7月24日

国際化が時代のキーワードになりつつある中、長岡高専と中国・黒龍江水利専科学校との間に学術交流協定が調印された。交流協定は平成7年と平成13年に更新され、姉妹校としての交流が続いた。また、調印とあわせて学内に国際交流委員会が設置された。



平成4年4月1日

平成3年度の試行期間を経て、**週5日制**が完全実施された。また、**清花寮**（女子学生寮）が開寮した。

平成6年1月28日

本校では初めての**推薦入試**（面接・作文）が実施された。推薦入試は県立高校や全国の高専でも導入が進んでおり、優秀な学生を確保するための有力な一方法として認識されるようになっていた。平成6年度の入試倍率は、推薦・学力を合わせて、前年の1.5倍を上回る1.8倍となった。

平成6年4月1日

工業化学科が材料工学コースと生物応用コースからなる**物質工学科**に改組された。

平成7年4月1日

土木工学科が**環境都市工学科**に改組された。土木工学に地球環境科学や水環境科学など新しい分野が加わった。

平成8年3月

平成7年度卒業生203名のうち、進学者が96名、就職者が95名となり、**はじめて進学者数が就職者数を上回った**。

平成9年8月

全国高専体育大会で長岡旋風が巻き起こる。ハンドボール部が初優勝（7日）、柔道部が団体が初優勝（9日）、バレーボール部が2年連続3度目の優勝（10日）を飾った。



平成11年1月27日

長岡高専と地域社会との連携交流の活発化などを目的として、**長岡高専技術協力会**が発足した。また、この年には、「親と子のペットボトルロケット実験」やサイエンススクール「高専夢工房」など地域開放事業の取り組みが行われた。地域連携、地域貢献が一段と強調される時代の到来であった。

平成12年4月10日

長岡高専の**専攻科**が設置され、この日、第1期生が入学した。平成3年に高専に専攻科を設置することが可能となっており、このときまでに国立高専25校で設置されていた。本校専攻科の第1期生は、電子機械システム工学科が16名、物質工学専攻が7名、環境都市工学専攻が6名だった。



専攻科フォーラム 2000（平成12年12月7日）



平成12年12月3日

東京・両国国技館で行われた高専ロボコン2000第13回全国大会で、本校の「長岡猿軍団」チームが、独創的なアイデアと優れた技術力を認められ、最も栄誉のある**ロボコン大賞**を受賞した。



平成14年8月2日

創立40周年を記念し、前東大総長の蓮實重彦氏を講師に招き、記念講演会を開催した(演題「人はいかにして変化の主体となるか」)。

平成14年11月11日

教育研究、産学連携のランドマークとして建設が進められていた**6号館**が完成し、この日、竣工記念式典が挙行された。ある学生は、冷暖房やエレベーターなどの施設の充実ぶりに驚きを述べるとともに、高専生にとって一番プラスになったこととして、「横のつながりが薄かった高専生を物理的にくっつけた」点を指摘した。



平成16年4月1日

国立高専が**独立行政法人**として再スタートした。本校を含む55の国立高専は、「独立行政法人国立高等専門学校機構」のもとに統合され、新しい歴史の一步を踏み出した。同時に本校では、電気工学科が**電気電子システム工学科**に名称変更された。

平成16年9月22日

中国・黒龍江工程学院との間に学術交流協定が調印された。



平成16年10月23日

午後5時56分に**中越地震**が発生し、本校も施設・設備に大きな損害を受けた。学生・教職員にも多くの被災者が出て、臨時休校やむなき状況となった。本科5年生と専攻科生は、12月6日から長岡技術科学大学で授業が再開され、本科1～4年生は翌年1月4日から本校で授業が再開された。これ以降、完全復興までの間、関係諸機関から有形無形の支援を受けつつ、教職員・学生一丸となった懸命の対応が行われた。



平成18年5月8日

5年間の準備期間を経て、本校4・5年及び専攻科の教育プログラム「生産システム・環境工学プログラム」が**JABEE認定**を受けた。

平成18年11月2日

中越地震発生から2年。ご支援をいただいた方々への感謝の意を込め、**復興記念式典**が行われた。式典後には、洗心館前広場で記念植樹(樺)が行われた。

平成21年10月27日

中国・南海東軟信息技术職業学院との間に学術交流協定が調印された。



平成23年4月4日

創立50周年を記念して制定されたロゴマークが公表された。9月13日には、50周年記念誌『高志台の五十年』が発行された。



長岡工業高等専門学校 校歌

作 歌 宮 柊二
作 曲 小 松 清

（１）

高志台 われら仰がむ
技 術
明晰にして深きもの
長岡高専 われら仰がむ
東山つらなり立ちて
霜くだるあかつきの空
月 冠とかかりたり

（２）

高志台 われら望まむ
科 学
精詣にして厚きもの
長岡高専 われら望まむ
信濃川下るを息めず
耕して長かなる岸
露 閃々と光りたり

（３）

高志台 われら誇らむ
工 業
総合にして勁きもの
長岡高専 われら誇らむ
新しき炎のころ
生みなさむ未来の世代
わが 胸底はそこにあり

作詞者の宮柊二（1912～1986）は、新潟県北魚沼郡堀之内町（現・魚沼市）生まれの歌人。昭和28年「コスモス」を創刊し、昭和52年には日本芸術院賞を受賞しています。

作曲者の小松清（1899～1975）は、秋田県生まれのフランス文学者・音楽評論家・作曲家。東京帝国大学仏文科を卒業し、のちに東大教授・東京芸大教授・東海大学教授を歴任しました。

校歌の作詞・作曲が完成したのは、昭和41年5月のことで、第1回高志祭の最中の6月4日に校歌の発表演奏が行われました。その後、昭和42年11月27日に宮・小松両氏が招待され、改めて演奏発表会が行われています。

なお、両氏が校歌を作詞・作曲した学校として、新潟県立見附高校・中越高校（私立・長岡市）北越高校（私立・新潟市）が知られています。

